

滝亭鯉丈『滑稽和合人』に見られるオノマトペ

中里 理子

はじめに

『滑稽和合人』は江戸末期の滑稽本で、『日本古典文学大辞典』によると四編十三冊から成り、初編（1823年刊）から三編（1841年刊）は滝亭鯉丈作、四編（1844年刊）は為永春水作とされる^{注1}。「題名は和合神のもじりで、なかのよいなかまの意」という。内容は、浅草に住む和次郎と、矢場七、張吉、土場六、楊次郎、茶見蔵の六人を中心に「半可通の愚慢」も時折登場し、「この連中の遊戯生活をえがいている」と解説されている。滝亭鯉丈は『花暦八笑人』の作者としても知られており、同辞典の「滝亭鯉丈」の項^{注2}には、『八笑人』『和合人』の二作について「廃頹期の江戸町人の低俗な遊戯生活を写實的に描いて独自の位置を占め」ており、「鯉丈の名が文学史に記憶されるのは、この二作によるものである」と書かれている。

このように『和合人』は鯉丈の代表作の一つなのだが、同辞典「和合人」の項では、「日常生活の悪ふざけによってストーリーが展開されるために、末期江戸戯作特有の作為的な笑いが多く、半可通愚慢のいじめかたも陰惨に過ぎる」と指摘されている。一方、同辞典「八笑人」の解説を見ると、「遊びと無駄口で構成されている」が、そこにある「文芸精神は「趣向」である」とし、「滑稽本中最高に面白く、天下無敵の名作である」と高く評価されている^{注3}。『八笑人』とは異なり本作品で描かれるのは作為的な笑いであり、江戸町人の日常で行われるや悪ふざけを描いたものであることを念頭に置きつつ、オノマトペの分析を行っていく。なお、同辞典では角書の「滑稽」を省き「和合人」で立項されており、本稿でも『和合人』と表記する。

滑稽本のオノマトペを整理した先行研究に、『東海道中膝栗毛』を対象とした天沼寧（1977）、『浮世風呂』を対象とした酒井知子（2019）があるが、管見の限りでは『和合人』のオノマトペを取り上げた研究は見られない。そこで本稿では、『和合人』に見られるオノマトペを抽出し、他の滑稽本に見られたオノマトペと適宜比較しながら、『和合人』のオノマトペの特徴をまとめることを目的とする。整理にあたっては天沼（1977）に倣って擬音語・擬態語に分類し、それぞれの特徴を見ていく。また、地の文、ト書き、セリフと三つの部分に分けて擬音語と擬態語を抽出し、部分ごとに考察したのち、作品全体の特徴をまとめる。

オノマトペの抽出対象とした本は、塚本哲三校訂『花暦八笑人・滑稽和合人・妙竹林話七賢人』（有朋堂書店、昭和2年刊）である。本文に曖昧な表記があった場合は、帝国文庫「滑稽名作集上」第25編（博文館編輯局校訂、博文館書店、明治43年刊）^{注4}所収の本文で確認した。

抽出するオノマトペは和語を対象とし、「しん／＼」「悠々」のような漢語由来のオノマトペは扱わない。抽出に当たっては近世のオノマトペも収録している『日本語オノマトペ辞典』を参考にし、辞典に掲載されていない語は『古語大辞典』等によって個別に判断する^{注5}。なお、「今のトン／＼はわかるめエ」（トン／＼＝戸を叩く音：筆者注）のように名詞形になっているものは扱わないが、「しよぼ／＼雨」のように複合語になっているものは取り上げた。抽出の際は、「ふと」「ほつと」「ぎよつと」のように1拍・2拍のオノマトペは後接する助詞「と」までを記す。繰り返し記号は便宜上「／＼」「／＼」と表記する。表記は、用例すべてがひらがな・カタカナの場合はその表記にしたがうが、「とん／＼」と「トン／＼」、「びつくり」と「喫驚」のように表記が複数ある場合は「/」で併記した（ただし、どちらかの表記に偏る場合は多い方に統一した）。「ハハハハハ」「ハハハハハ」のように繰

り返し符号の使い方が異なる語も同一語とみなし、表記を統一した。「ガラ／＼」「グワラ／＼」のように直音と合拗音の表記があるものは同一語として扱った。「ず」と「づ」も同一とみなし、「ずつ」と「づつ」とを同一語として扱った。また、「グツともスウとも」のような慣用的表現は扱わなかった。

1 『和合人』のオノマトペの数

『和合人』の本文に見られるオノマトペの異なり語数・延べ語数を以下に示す。

地の文：異なり 23 語（擬音語 10・擬態語 13） 延べ 34 語（擬音語 20・擬態語 14）

ト書き：異なり 72 語（擬音語 21・擬態語 51） 延べ 128 語（擬音語 24・擬態語 104）

セリフ：異なり 155 語（擬音語 54・擬態語 101） 延べ 470 語（擬音語 235・擬態語 235）

『和合人』のオノマトペ総数は 632 語（擬音語 279 語・擬態語 353 語）であり、作品全体の異なり語数は 214 語（擬音語 76 語・擬態語 138 語）である。総数に比して異なり語数が少なく感じられるのは、複数回用いられる語が多いためであろう。

作品に見られた全 632 語を対象とし、部分ごとにオノマトペの特徴を見ていく。本文は地の文が少なく、さらにト書きよりセリフが圧倒的に多いため、分量に応じてセリフに見られるオノマトペが格段に多くなっている。部分ごとのオノマトペは本文で項目ごとに示す。なお、本文に付く序の部分に擬音語 1 例（吐 [どつ] と笑う）、擬態語 1 例（のろ／＼牽出す）があるが、本稿では扱わない。

2 擬音語

2.1 地の文の擬音語

地の文の擬音語は種類が少ないが、【人物の発する音声】【人物が動いて立てる音】【その他】に分けられる。以下に分類した語を示す（項目名は略記する）。（ ）にオノマトペに係る語を抜き出したが、係る語がない場合は《 》に説明を書いた。複数例ある場合は語の後に数字で示す（以下、用例を示す場合は同様とする）。

【人物の音声】 ハツト（吹き出す） ワア引《悲鳴》

【立てる音】 トン／＼《戸を叩く》 トン／＼／＼4《戸を叩く》 トン／＼／＼／＼6《戸を叩く》
べつたり（こける）

【その他】 ガラ／＼／＼／＼ /グワラ／＼／＼／＼《鈴の音》 グワラ／＼／＼／＼ゴロ／＼／＼
／＼《雷の音》 チャアン2《仏壇のりん》 ボラン《鐘の音》

多用されているのは戸を叩く「トン／＼」という音とその反復語形である。雨の降る暗い夜、外には誰もいないのに戸を叩く音がして名前が呼ばれると屋内の者が驚くだろう、と悪戯を仕掛ける場面で繰り返し用いられている。悪戯の説明場面から悪戯を仕掛ける場面までくどいほど多用されており、この作品が「悪ふざけ」「作為的な笑い」と評されることもうなずける。その他、仏壇のりんの音や懐に入れた鈴の音、雷の鳴る音、暮六ツの鐘の音など、日常にある物音が見られる。作品の舞台（初編から三編中まで）が和次郎の住居とその周辺の狭い世界であることが反映されている。

2.2 ト書きの擬音語

ト書きの擬音語も地の文と同様に多くは見られないが、前項と同様に【人物の発する音声】【人物が

例である^{注10}。笑い声 142 例は、セリフの擬音語 235 語の約 60%を占めているが、他の滑稽本の笑い声の割合は^{注11}、『浮世風呂』は約 65%、『浮世床』は約 52%、『四十八癖』は約 41%であり、『和合人』で笑い声が描かれる割合は比較的高いと言える。悪戯を仕掛けて大笑いして喜び合う六人組の姿が伝わってくる。

笑い声以外の擬音語を、ト書き・地の文と同様に分類すると以下のようなになる。なお、係る語がなくオノマトペ単独で用いられる場合は「φ」で示す（以下同じ）。

【人物の音声】ウン《呻き声》 エヘン《咳払い》 キヤツと（いふ） キヤツ／＼（といふ聲） ゲエ／＼2《嘔吐》 ゲエ／＼2《嘔吐》 ゲエイ／＼《嘔吐》 ゲツゲツ（といふ） シヤア引《小便の口真似》 チョツ 17《舌打ち》 チョツ／＼／＼3《犬を呼ぶ音》 ハアクシヨ 4《くしゃみ》 ハアクシヨ／＼4《くしゃみ》 ハクシヨ／＼《くしゃみ》 ヒイウ、ハ、ハ、ハ《笛の口真似》 ヒヤ／＼《悲鳴》 ヒヤア／＼《悲鳴》 フウ引（吹き出す） フウ 5《鼻を鳴らす》 ブウ引（吹き出す） フム《鼻を鳴らす》 フン 7《鼻を鳴らす》 フン引《鼻を鳴らす》 ヘツクシヨ 4《くしゃみ》 ペツ／＼／＼《吐き出す》 ワア《叫び声》 ワア引 2《叫び声》 わつと（いふ）

【立てる音】花欄〔かりん〕（頭をはりとばす） トン／＼11（叩く 7・φ 2・當る・する） ぴつしやり（戸に耳を掛ける）

【その他】 キヤン／＼／＼《犬の声》 ぐわりり 6《戸を開ける 5・φ》 コン／＼（といふ） チウ／＼（申す） チャアン《鉦の音のこと》 チョキリ／＼（音がする） ぽた／＼／＼《酒がたれる様子》

セリフでは当然ながら人物の発する音声が多い。特徴となる点を挙げると、まず、「エヘン」という咳払いや「チョツ」という舌打ちなどの音が多いことが挙げられる。二点目として、嘔吐やくしゃみを表すオノマトペの種類と数が多いことが指摘できる。「ゲエ／＼」など嘔吐の音は二つの場面で用いられている。一つは狐に化かされたふりをして物を食べ、周囲にミミズや馬の糞尿を食べているのだと勘違いさせたため、見ている側の胸が悪くなって吐き気を催す場面、もう一つはタバコの火を借りた女性の顔が膿み爛れ唇が腐っているのに周りに促されて火を借り、その後に思い出して「ゲエ／＼、ペツ／＼／＼」と吐き気を催す場面である。どちらも行き過ぎた悪戯や悪ふざけの場面となっている。くしゃみが多用されている場面は、地の文で触れた「トントン」の悪戯に続く箇所、狐狸が化けて悪戯をしたと思いついで正体をあぶりだそうと火鉢に唐辛子を入れたために、そこにいた人々が盛んにくしゃみをするという場面である。複数人のさまざまなくしゃみが写實的にオノマトペで表現されている。特徴の三点目として、「キヤツ」「ヒヤア／＼」「ワア」など驚きや悲鳴のオノマトペが多いことが挙げられる。悪戯されて足の向う脛から股まで火が燃え移ったり、悪戯で薄荷を入れた酒を飲まされたりするなど、悪ふざけをされて悲鳴を上げるさまざまな場面で用いられている。

人物の立てる音では「トン／＼」が多いが、これは地の文の「トン／＼」等と同じ場面で用いられており、「表の戸をしきりにトン／＼叩くから、ハイどなたと明けて見ると誰も居ずサ。内へはいつて戸をみると、又トン／＼といく度か同じ事だから（三編上）」と悪戯の内容を話して聞かせるセリフで多用されている。その他の音の「ぐわりり」も「トン／＼」と同じ場面で用いられている。「戸のそばで、ヲイ和次さん／＼と呼ぶサ。ぐわりりと明けて見ると人が居ずサ。（三編上）」と悪戯を説明し、「そこであんまり腹がたつから、トン／＼叩く、すぐにぐわりりと明けて、正体を（三編上）」とその

顛末を語るところまで延々と同じようなセリフが続き、「トン／＼」「ぐわらり」が繰り返されている。悪戯の執拗さや幼稚さを感じさせ、明るい笑いの悪戯というよりは悪ふざけが過ぎるという印象を与える要因ともなっている。

その他の音には、犬の声や「コン／＼」という狐の声、「チウ／＼」という雀の声など、身近な動物の一般的な鳴き声のオノマトペがいくつか見られる。作品の舞台のほとんど（初編から三編中まで）が日常生活の範囲であるためであろう。

「花欄 [かりん]」は「あたまを花欄 [かりん]とはりとばされても紅木 [こうき]に粗相とあやまらにやアならねへ（三編下）」と、木尽くしの言葉遊びとして用いられている。このセリフの前に「それだから今のやうに、唐木目 [からきめ]にあふのだ」というセリフがあり、後には「其時は、エ、江の島唐桑 [からくわ]へ柘木 [いすぎ]の旅ゆゑ」と続き、木に関連する言葉を入れて地口でセリフを言い合う場面である。言葉遊びにもオノマトペを用いていることがわかる。

3 擬態語

3.1 地の文の擬態語

地の文の擬態語はそれほど多くはない。人物に関するオノマトペが多いため、【人物の動作・様子を表す語】【人物の心情・感覚を表す語】と人物以外の【その他】に分類した（項目名は略記する）。

【動作・様子】うか／＼（來かかる） きよろ／＼（覗き込む） ずつと（這る） そつと2（戸を開ける・入れる） そろり／＼（忍び來る） たら／＼（むだ口） ぬらくら仲間 風 [ふ]と（思ひつく） ぶらり《糸瓜がたれる+暮らす》 まぢ／＼《目の様子》 むしや／＼（やらかす）

【心情・感覚】くわつと（せきあげる）

【その他】 ペロリ（犬がなめる）

状況や物の様子を表すオノマトペはほとんど見られず、人物の動作や様子は悪戯に関わるものが多い。いくつか例を挙げると、「そつと」は、「おのれが懐中せし馬の屎の皮包をそつと出し（初編下）」のように悪戯を仕掛ける際に見つからないようにする様子を表し、「そろり／＼」は「引けども／＼手ごたへなければ、仕掛の工合をなほさんと、そろり／＼と忍び來る。（三編中）」のように気づかれずに悪戯の仕掛けを直そうと忍び寄る様子を表す。また、悪戯の仕返しをしよう待ち構える所へ、別の人物が「うか／＼」とやってきて間違えて仕返しされ、「ワア引と一聲そのまゝに、氣も魂もつり上り、べつたりこけて目をまぢ／＼」と動転する様子がオノマトペを用いて描かれている。

「ぶらり」は、「世の中を何の糸瓜と思へどもぶらりとしては暮らされもせず（四編上）」という狂歌の中で掛詞として用いられている。「くわつと」は「扱はいつものわるいたづらも、あまり手ひどき仕方ぞと、くわつとせきあげ（三編中）」と、怒りの心情を感覚的に表している。感覚的なオノマトペはセリフなどにも多く見られるため、後述する。

3.2 ト書きの擬態語

ト書きに見られた擬態語を、地の文と同様に分類したが、次項のセリフの擬態語にも多用された語と比較するため、【表情・姿】【強調する語】を加えた。また、【動作・様子】は種類が多いため、①勢いのある動作、②密かな動作、③素早さや軽い動き、④落ち着きのない様子・不注意な様子、⑤緩や

かな様子、⑥その他に分ける（項目名は適宜略記する）。

【動作・様子】

- ①勢いある動作：グイと3（取る・呑む2）　ぐひぐひ（呑む）　ずいと7（上がる4・はいる3）
ずつと2（來たる・立つ）　ついと2（上がる・立つ）　づんと（飛びおる）　によいと（箒を突き出す）
- ②密かな動作：こつそり（つゝむ）　そつと9（あける2・火をつける・袖を引く・出す・見せる・抜け出る・のぞく・立つ）　そろ／＼3（あける2・始める）　ひそ／＼（さゝやく）　ひそ／＼ばなし　ひつそり2（φ・ひそみかへる）
- ③素早さ・軽さ：ざつと（する）　ちやつと3（ひろふ・取る・入れ置く）　ちよいと5（置く・取る・顔を撫づる・顔へ袖を當てる・叩く）　ちよい／＼（諸藝を横ぐはへ）
- ④落ち着かない・不注意：うつかり2（覗く・扇を使ふ）　うろ／＼（見回す）　きよろ／＼（見まはす）　そは／＼2（上がる・する）　トチ／＼（する）　まじり／＼（する）　もじ／＼（する）
- ⑤緩やかな様子：のそ／＼（這ひ出す）
- ⑥その他：　ぐつすり（寝入る）　しかと（見とめる）　しやんと（なほす）　つけ／＼（はぢしめる）　ぱつたり（行きあたる）　不圖〔ふと〕（のぞき見る）　ぶつくさ2（する・小言を言ふ）　ぶつ／＼2（小言を云ふ2）　ぶる／＼2（ふるへる・する）　むしや／＼2（食ふ2）　むしやり／＼（くふ）　わや／＼（いふ）

【心情・感覚】ぎよつと4（する4）　しを／＼（φ）　ぞく／＼（する）　つくねんと（居る）　にこ／＼もの　ハツと4（思ふ・顔を見合はす・しらける・心づく）　びつくり14（する6・ふるへ上がる・φ5・尻餅をつく・驚く）　ホツチリ《首元に雨だれ》

【表情・姿】ちよこ／＼（あゆむ）　ぴか／＼《眼》

【強調する語】ぐつと（氣をなをす）　どつさり（入れる）

【その他】　なみ／＼（つぐ）　パツと（灰を吹立てる）　むちやくちや（利いた風）

ト書きがもとは歌舞伎脚本で「俳優の動き・出入り」等を示したという特性があるためか、人物の動きを表す語が多い。まず、①勢いのある動作、②密かな動作、③素早さや軽い動きを表す語の例を以下に挙げる。

- (1) ト、大笑ひの所へ、矢場七は諸色をとゝのへずいとはいり、（二編追加上）
- (2) 兩人ふるへあがりながら外へ出でんとする所へ、土場六といふ友達ずつと來り、（初編上）
- (3) ト手酌で一ぱいグイと呑み、（三編中）
- (4) おきあがらんとする頭の上へ、しゆるぼうきをによいと突きだせば、又びつくり尻もちをつき、（三編中）
- (5) こつそりと風呂敷へつゝみ、母の便所へ行きたる間をうかゞひ、そつとぬけ出て（二編追加下）
- (6) いよ／＼ゑつぽに入り、暫くやめて居たりしが、雨戸をしめて内へいり、よほど程へしゆゑまたそろ／＼と始める。（三編中）
- (7) 残りの人は内にいり、雨戸をしめてひつそりとひそみかへつて音もなし（三編中）
- (8) 土場六は呑みすごせしうへ藝者にうかれ、〈中略〉たくはへ持ちし狐の尾、其外くさ／＼のもの

のしだらなく取落せしを、矢場七はちやツとひろひ藝者の顔をちよいと撫づれば（初編下）

①勢いのある動作については、例（1）（2）のように出入りや移動を表す「ずいと」「ずつと」「ついと」が多用されている。また、例（3）のように酒を飲む際の「グイと」「ぐひぐひ」や、例（4）のように「によいと」「づんと」も勢いの良さを表している。これらのオノマトペから、日ごろは威勢よく振る舞う人物像が浮かび上がる。②密かな動作は、地の文と同様に悪戯を仕掛ける際に見られるもので、「そつと」「そろ／＼」「こつそり」「ひそ／＼」「ひつそり」が見られる。例（5）～（7）はいずれも悪戯を仕掛けようと人目を忍んでいる様子を表す。③素早さや軽さを表す語は例（8）のように「ちやツと」「ちよいと」が多用されている。「ちよいと」は軽い動作に広く用いられている。例（8）は悪戯をしようと懐に入れて置いた狐の尾など諸々の仕掛が落ちそうになるところを、仲間が素早く拾い、ついでに芸者にちょっかいを出している。悪だくみに機転が利く遊び者の人物像が描かれている。

次に、人物像が窺われるオノマトペとして④落ち着きのない様子・不注意な様子を表す語が挙げられる。「うつかり」「うろ／＼」「きよろ／＼」「そは／＼」「とち／＼」「まじり／＼」「もじ／＼」が分類されるが、これらは作中人物の不注意さや落ち着きのなさを表している。

(9) 「なんだ内にある。ドレどこに」「ソレおめへの直そばにヨ」「エ、引」ト、ふるへあがり立つてきよろ／＼見まはし、（三編中）

(10) 早々にわが家へかへり、何かそは／＼二階へ上り、そろ／＼と箆筒の引出しをあげ、親父の袴、羽織、脇差、衣類、下げ物まで、こつそりと風呂敷へつゝみ、母の便所へ行きたる間をうかゞひ、そつとぬけ出て、（二編追加下）

(11) 「〈前略〉何だかおれにも分らなくなつた」ト矢場七はひとりトチ／＼してゐる所へ、（二編上）

(12) 愚慢は〈中略〉このやうなるさしかゝりたる思ひ付事などには、たゞまじり／＼として、うけこたへも思ひ付も少しも出来ぬなり、（二編追加下）

例（9）は脅かされて慌てふためく様子を表している。例（10）は先の例（5）の前の箇所、悪戯を仕掛けるために家から密かに衣類などを持ち出そうとする場面であり、落ち着きのない様子が描かれている。例（11）の「トチ／＼」は、『古語大辞典』には立項されていないが、『角川古語大辞典』には立項されており、「擬態語。慌てうろたえて行動がもたつくさま。また、動作の鈍いさま。まごまご。もたもた」と記述され、本作の用例がある。『江戸語大辞典』にも同様の記述と本作の用例が掲載されている。『時代別国語大辞典 室町時代編四』にも「とちとちと」の項^{註12}があることから、江戸時代特有の言葉というよりは古い時代の言葉であると思われる。例（12）は急な機転が利かず、どうすることもできない様子を表す。

⑤緩やかな様子は「のそ／＼」1例しか見られない。⑤その他に分類した「ぶつくさ」2例「ぶつ／＼」2例は文句を言う態度を表し、「ぶる／＼」2例は怖がって震える様子を表すが、いずれも人物造型につながっている。以下に例を挙げる。

(13) トぶつ／＼小言を云ひながら行き過ぎる。（三編下）

(14) 大に驚きふるへあがりぶる／＼しながらりきみかへつて座敷へかへる（三編中）

(15) おらアモウすつぱり見たから、見ずといゝ。（初編上）

例(13)の「ぶつ／＼」や「ぶつくさ」は、ひどい目にあつてグチをこぼす際に用いられ、大人げない様子を表している。小言を言うさまを表すオノマトペは『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』にも多く見られ^{注13}、滑稽本に登場する江戸庶民の人物像が窺われる語である。例(14)は怖がって震える小心者の様子を表すが、次に挙げる【心情・感覚】に驚きを表す語が多いこととも関連する。

【心情・感覚】は、悪戯を仕掛けられて「ぎよつと」「はつと」「びつくり」するという驚きを表すオノマトペが多用されている^{注14}。悪戯を仕掛けて相手が驚く様子を笑うという滑稽本の本質が、オノマトペからもうかがえる。また、「ホツチリ」は、「トいひながら傘をすぼめると、ちりけもとへ雨だれがホツチリ(三編上)」と用いられており、首筋に当たる雨だれの感覚を表している。感覚を表すオノマトペは、次項で扱うセリフに多用されている。

3.3 セリフの擬態語

セリフの擬態語は、地の文やト書きには用いられなかったセリフ独得の語が見られる。分類項目は地の文と同様とするが、セリフの擬態語は数と種類が多いため、係る語や説明は省き、オノマトペだけを示すこととする。種類も多いため、人間の動作や様子に関わるものについてのみ分析する。

【動作・様子】

- ①勢いのある動作：がぶり／＼ ぐいと5 グイ／＼3 ずいと5 ゴツと7 /づつと つけ／＼2
- ②密かな動作：そうツと3 そつと8 そろ／＼5
- ③素早さや軽い動き：さつくり さつ／＼と2 すた／＼ ちよいと16 ちよいちよいと ひよいと ひよい／＼
- ④落ち着かない・不注意：うか／＼ うつかり きよろ／＼3 トチ／＼ まご／＼ まぢりまぢり
- ⑤緩やかな様子：のそ／＼ フラ／＼ ぶら／＼2 ぶらり／＼ ゆる／＼ ゆるり6 よろり
- ⑥その他：がた／＼ ぐづ／＼4 ざつと2 しつかり7 じろじろ ちび／＼ ちよつぱり2 ちら／＼ ちらり／＼ づぶ／＼ とつくり とろ／＼ とろり ぬく／＼ びつしより2 風斗[ふと] フイト ポンと2 ポン／＼ むしや／＼ むつくり

【心情・感覚】きよつと グビ／＼ ザラ／＼ しやア／＼4 しやれ／＼ ぞつと2 だぶ／＼ てつきり とき／＼ ぬら／＼ びく／＼3 びくり びつくり20 /喫驚[びつくり] ひよつと4 /萬一[ひよつと]^{注15} ひり／＼3 ピリ／＼ ベツたり ベト／＼ ほつと むか／＼ むづ／＼

【表情・姿】こけこけ ひよこすか2 ほんのり

【強調する語】ぐつと8 さつぱり3 すつかり すつぱり5 ずんど ちやんと どつと5 どんと6 びたり むか／＼^{注16}

【その他】からり きつと クワツ／＼ ぐんにやり さつぱり じめ／＼ しょぼ／＼2 すいと そぼ／＼ たつぷり3 たんと3 のろり／＼^{注17} ハツと3^{注18} バラ／＼ ピラ／＼3 ピラ／＼ピラ／＼ ひんと ピンと2

【動作・様子】を見ると、①勢いのある動作はト書きと同様に「ずいと」「ずつと/づつと」「ぐいと」「ぐいぐい」が多用されている。「ずつと/づつと」はト書きと同じく「来る・行く」などの移動を表す例が多いが、他に勢いよく行う動作に用いられた例があり、例えば「ずつとひつぱづして歸つて来たが(二編上)」と勢いよく相手を引き離す動作に用いられている。「ぐいと」は「ぐいと押戻された

から（初編中）」のような動作を表す例が多いが、「一ツぱい喰ツた勢で、グイと寐て仕舞つたと見える（初編中）」のように動作の強調を表す例も見られる。後述する【強調する語】はセリフに多く見られるが、「ぐいと」も同様に強調の用法があると思われる。「つけ／＼」は「これほどに、つけ／＼と恥しめても、いけしやア／＼だ（二編下）」のように強気な態度を示し、「ずいと」等が威勢の良さを表すのと同様に人物描写につながっている。②密かな動作もト書きと同じく「そつと」「そろ／＼」が多い。「そうツと」というセリフ独得の語形もあり、擬音語でくしゃみや嘔吐の音を写實的に表し分けていたことと同じく、話し言葉をそのまま活写する様子がかがえる。③素早さや軽い動きで目立つのが「ちよいと」16例である。地の文にも5例見られたが、セリフでは「女中方は皆ちよいと一切くって見たがるさうだが（二編上）」「袴や脇差がいるから、ちよいと借るのだ。夕方には返すヨ（二編追加下）」のように、現代語の会話で多用される「ちょっと」に近い用法が見られる。「ちょっと」は『大辞林』を見ると意味の一つに「軽い気持ちで行うさま」がある。江戸時代にも「ちょっと」は多く見られ、本作でもたとえば「チヨツト置いた疊が、烟管へくツ付いて、疊をちよいと引立てても動かねへ（初編上）」と用いられている。「ちよいと」は動きの軽さを思わせるためオノマトペとしての機能が残っていると考えているが、「ちよつと」と同様にオノマトペらしさを失いつつある語である。④落ち着きのない様子・不注意な様子を表す語は、ト書きに見られた語とほぼ同じである。セリフでは「ヲイ楊公、何をうつかりしてあるのだ（初編下）」「何をきよろ／＼するのだナ（初編下）」「人の差圖をきかねへから、いつでも差掛つてまご／＼するのだ（二編追加上）」のように相手をたしなめたり非難したりする場合に用いている。⑤緩やかな様子はト書きよりセリフに多く見られる。「ツイフラ／＼とひやかしに行つて九ツを打つて、モウすつぱりひやけたから、ぶら／＼と歸りがけ（二編上）」のような例があり、登場人物の気楽な様子がかがわれる。⑥その他では多用された「しつかり」「ぐづ／＼」を取り上げる。「しつかり」はセリフにのみ見られるオノマトペで、氣をしつかりともたつせへヨ（初編下）」のように「氣をしつかり持つ」という表現が4例、それ以外は「茄子の大きいやつを片々へしつかり差し（三編上）」「どうも氣丈だ。しつかりしたもんだ（三編中）」のように確実さにつながる意味で用いられ、現代語の用法に近い。「ぐづ／＼」は「言う」2例、「する」2例と現代語と同じ意味を表し、「何をてん／＼にぐづ／＼云つて居るのだ（三編中）」「早く吸付けねへかな。ぐづ／＼為た男だ（四編下）」と非難する意味で用いられている。

【心情・感覚】は、ト書きと同様に驚きや動揺を表す語が多く、「きよつと」「ぞつと」「どき／＼」「びく／＼」「びくり」「びつくり」が見られる。「エ、引喫驚びつくりさせアやがつた。いま／＼しい。胸がどき／＼して来た（初編上）」のように、小心者たちが悪戯を仕掛けられて驚く様子がオノマトペで描かれている。「しやれ／＼」は「しやれ」の地口を言い合う際に見られ、「しやればサ、此身も舌がしやれ／＼するやうだ（四編上）」と舌の感覚を表している。同様に「グビ／＼（＝咽）」「だぶ／＼（＝腹）」「ぬら／＼（＝口の感触）」「ひり／＼（＝足、口と咽）」「ピリ／＼（＝咽と口）」「べつたり（＝足）」「べと／＼（＝足の感触）」「むか／＼（＝胸）」「むづ／＼（＝首元）」と身体感覚を表すオノマトペが多く見られる。感覚を表すオノマトペの多用は他の滑稽本にも見られた特徴である。

【表情・外見】は、『八笑人』などと比べると少ないことがわかる。【強調する語】はト書きと比べて多くの種類のオノマトペが用いられている。いくつか例を挙げる。

- (16) 差酒はチト耳なれたれど、賞伴で地口がぐつと新しくなるぜ。（三編上）
- (17) 和次さんの所へ一所に行つてごらうじると、さつぱりと譯がわかる事だ。（二編追加下）
- (18) おらアモウすつぱり見たから、見ずといふ。おめへ行つてみねへ（初編上）

(19) おまけに爐へどんとぶちこんだ炭がどつと起つたもんだから、イヤあび焦熱も斯くやらんサ。

(二編追加)

「ぐつと」はト書きにも「ぐつと氣をなをし(初編下)」という例があったが、例(16)のように会話の中で意味を強める働きがあり、8例と多用されている。「さつぱり」はオノマトペ(情態副詞)と言うよりは陳述副詞化している例があり、「さつぱりわからねへ(初編上)」のように打消し語と呼応する12例はオノマトペとして扱っていない。一方、例(17)のように打消し語と呼応しない例もあり、「すつかり」と同じような強調の働きをしていると考えられる。例(18)の「すつぱり」、例(19)の「どん」と「どつと」についても同様で、オノマトペを省いても文意は通じることから、強調の働きをしていると考えられる。強調表現は特にセリフに多く見られ、威勢の良い江戸っ子の話し言葉の特徴と思われる。セリフに強調表現が多い点は、他の滑稽本にも共通する特徴である。

なお、「ぐつと」に「寝る気もなく、ぐつとやつた様子だ(初編中)」という「ぐつと+やる」という表現が1例あった。他にも「オノマトペ+やる」という表現は多数あり、「さつくりやる」「とろりやる」「ボンとやる」「むしや／＼やる」「ゆるりとやる」が見られた。ト書きの擬音語に「かつちりやる」が1例あったが多くはセリフで用いられており、「オノマトペ+やる」は、より会話的表現であると思われる。『七偏人』にも「オノマトペ+やる」という表現が多くあり、江戸時代末期に広く用いられていたと考えられる。

4 まとめ

『和合人』の擬音語は、人物の発する音声や物音が多い。笑い声や悲鳴が多い点、咳払い舌打ち、鼻を鳴らす音などを細かく表している点、くしゃみや嘔吐の音などの種類や数が豊富である点で、写実的な描写を試みていることが窺える。これらの描写が写実的であるという特徴とゲップや嘔吐など不快な音が多いという特徴は、他の滑稽本とも共通している。人物以外の音は、作品の舞台のほとんど(三編中まで)が住居及びその周辺であるためか、天井裏の鼠の音や仏壇のりん、身近な動物の声など日常の物音が多く見られる。また、悪戯で戸を叩く音や開け閉めする音を表すオノマトペがしつこく繰り返されており、「日常生活の悪ふざけ」であることが印象付けられる。

擬態語は、人物の動きや様子、心情や感覚などがオノマトペによって描写され、人物造型と大きく関わっていることが見て取れた。勢いのある動作を表すオノマトペが多い点、悪戯を仕掛ける際の素早い動きや密かな様子がオノマトペで生き生きと表されている点、落ち着かない様子や不注意な様子、驚きや動揺を表すオノマトペによって悪戯された小心者の様子が描き出されている点が特徴として挙げられる。これらの特徴は他の滑稽本の特徴とも重なっている。日ごろは威勢の良い人物たちが悪戯を仕掛け合い、仕掛けられた側は怖がり怯え、仕掛けた側が大笑いして喜ぶという滑稽本の世界が、本作においてもオノマトペによって写実的に描かれていることが確認できた。

また、セリフに身体感覚を表すオノマトペや強調表現のオノマトペが多い点が他の滑稽本と共通すること、「オノマトペ+やる」という表現の多用とオノマトペが地口に使われている点が『七偏人』と共通することも指摘しておきたい。

おわりに

『和合人』には擬音語・擬態語ともに多くのオノマトペが見られた。セリフの分量が多いこともあり、地の文やト書き以上にセリフに多種多様なオノマトペが用いられていた。中村幸彦(1982)は「戯

作文章の特色」の一つとして「会話のみで、格別に地の文を加えずとも、話手自らの行動や、会話する相手の動き、感情の動き、更にはその場の情景と、その変化までが、読者に想像できる含蓄を持っている」点を挙げている^{注19}が、セリフに見られる豊富なオノマトペが、行動や相手の動き、感情の動き、情景等を生き生きと描き出すことにつながっていると言えるだろう。

筆者はこれまで『東海道中膝栗毛』以下いくつかの滑稽本を対象にオノマトペの特徴を見出してきた。作品ごとに、旅先をイメージさせるオノマトペ、芝居で用いられるオノマトペ、三味線等の鳴り物の口真似のオノマトペなど、その作品ならではのオノマトペの特徴が見られた。『和合人』の場合、同時期の『八笑人』『七偏人』と共通する点が多く見られ、独自性はほとんど指摘できない。しかし、他の作品と比較して三味線などの口真似が全く見られない点、芝居に関するオノマトペが少ない点が本作の特徴として指摘できる。このように、滑稽本全体のオノマトペを整理することでその作品の特徴も見えてくることを踏まえて、今後は本作品も含めた滑稽本全体の特徴をまとめたい。

【注】

- 1 『日本古典文学大辞典 簡約版』「和合人」の項（興津要執筆、1982頁）。なお、一～三編と四編で作者が異なるが、一つの作品としてまとまっているとみなし、四編までを調査対象とする。
- 2 『日本古典文学大辞典 簡約版』「滝亭鯉丈」の項（神保五弥執筆、1925頁）。
- 3 『日本古典文学大辞典 簡約版』「八笑人」の項（浜田啓介執筆、1484頁）。
- 4 『滑稽名作集 上』5版(帝国文庫：第25編)所収の『滑稽和合人』を国立国会図書館のデジタルライブラリで参照した。有朋堂本に「馬のフンをポタ／＼（初編下）」とある箇所が、デジタルライブラリ『滑稽名作集』には「馬のフンをホタ／＼」と書かれているなど多少の違いがあった。表記が異なる場合は有朋堂の本に従うことを基本とした。
- 5 例えば「ひよつと（万一の意味）」は『日本語オノマトペ辞典』「ひよっ」の項目②に「何かのはずみでものごとが起きるさま。万一。ひよつとして。」とあり、「ひよつと落たらどうする」という『浮世床』の用例が掲載されているため、オノマトペと判断した。「とんと」は、『角川古語大辞典』に「①擬態語。事のなされるのがすばやいさま。急にすっかりそうなるさま。②転じて、事や状態が徹底しているさま。すっかり。まったく。」とあるが、抽出した例が「とんと取あへません（初編下）」のように打消し語の強調として用いられているため、ここでは取り上げない。
- 6 「ウゝン」は意識が戻る際のうめき声である。小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』「うんうん」の項に「③苦しがつてうめく声。力んだ時に思わず出す声。また、そのさま」とあり、『和合人』では「ウゝン」「ウン」の語形でうめき声が表されているため、擬音語として抽出した。
- 7 松村明編『大辞林 第二版』「ト書き」の項（1812頁）。
- 8 「天窗」の振り仮名を〔 〕で示している。以下の用例も同様に、読みにくい語には〔 〕で読み方を示す。
- 9 拙稿（2015）「オノマトペにおける音と意味の関連—隣接するオノマトペの意味の重なり—」『表現研究』102号での考察による。
- 10 実際の音声ではない例は、「ケラ／＼」4例と、「へゝゝゝゝぢやアねへ（四編下）」と相手に言うセリフの「へゝゝゝゝ」1例である。
- 11 拙稿（2023）「式亭三馬『浮世風呂』に見られるオノマトペの特徴」『佐賀大学教育学部研究論文集』第7集第1号、拙稿（2023）「式亭三馬『浮世床』『四十八癖』に見られるオノマトペ—『浮世風呂』との比較を交えて—」『佐賀大学全学教育機構紀要』第11号の調査による。以下、他の滑稽

本のオノマトペに言及する際は、上記に加えて拙稿（2022）『東海道中膝栗毛』に見られるオノマトペ『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』9巻1号、拙稿（2024）「滑稽本『花暦八笑人』に見られるオノマトペの特徴』『佐賀大学教育学部研究論文集』第8集第1号、拙稿（2024）「梅亭金鷲『妙竹林話七編人』に見られるオノマトペ』『佐賀大学全学教育機構紀要』第12号の調査による。

- 12 『時代別国語大辞典 室町時代編四』「とちとち」の項に「茫然自失して、目ばかり見開いてうるたえた様子を見せるさま」とある。
- 13 注11に挙げた拙稿の調査による。
- 14 「びつくり」が浄瑠璃や歌舞伎脚本、滑稽本に多く見られることは拙稿（2024）「滑稽本『花暦八笑人』に見られるオノマトペの特徴』『佐賀大学教育学部研究論文集』第8集第1号で指摘した。
- 15 「ひよつと」は注5に示したようにオノマトペと判断している。心情に関わる語のため、【心情・感覚】に分類した。
- 16 「むか／＼」は『角川古語大辞典』には立項されていないが、『時代別国語大辞典 室町時代編五』には「ある事態が勃然として起こり、いや増しに増すさま」と解説されている。セリフには「むか／＼」が2例あるが、1例は「いまだに胸がむか／＼すらア（四編下）」と用いられており、【心情・感覚】に分類した。このようにいくつかの語は意味によって分類項目を分けている。
- 17 「のろり／＼」は牛が引く車を表すので、【その他】に分類した。
- 18 「ハツト」は心情を表すのではなく、3例とも「足元からハツト火が付いたら（三編中）」のように花火の勢いを表している。
- 19 『中村幸彦著述集 第八巻 戯作論』「第九章 戯作文章の特色」213頁。

【引用・参考文献】

- 天沼 寧（1977）『東海道中膝栗毛』に使われている擬音語・擬態語について』『近代語研究』5集、武蔵野書院
- 小野正弘編（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館
- 酒井知子（2019）『浮世風呂』のオノマトペについて』『立教大学日本文学』121号
- 中田祝夫編監修（1983）『古語大辞典』三省堂
- 中村幸彦（1982）『中村幸彦著述集 第八巻 戯作論』中央公論社
- 中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄（1982～1999）『角川古語大辞典』1～5巻 角川書店
- 日本古典文学大辞典編集委員会（1986）『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店
- 前田勇編（2003）『江戸語大辞典 新装版』講談社
- 松村明編（1995）『大辞林 第二版』三省堂
- 室町時代語辞典編修委員会（2000・2001）『時代別国語大辞典 室町時代編』四・五 三省堂
- 滝亭鯉丈作・塚本哲三校訂（1927）『花暦八笑人・滑稽和合人・妙竹林話七賢人』有朋堂書店

* 付記：本稿は科学研究費基盤研究(C)（一般）「近世の滑稽本・談義本に見られるオノマトペの記述的研究」（課題番号：22K00589）の研究成果の一部である。

（本学教授）